

会津本郷焼電信用碍子と 我が国の通信近代化

飯沼 一元

第一章 はじめに

会津本郷焼は蒲生氏郷公（一五五六～一五九五）の瓦生産を嚆矢とし、保科正之公（一六一一～一六七三）の時代には本格的陶器生産に発展した会津の伝統的な焼き物である。その後寛政十二年（一八〇〇）には磁器焼成が開始され、明治二十一年（一八八八）には電信用碍子^{がいし}の開発に展開した（文献1）。碍子とは図1に示すように、電柱に電線を固定するための部品で、絶縁性と堅牢性が求められる。

『会津本郷焼の歩み』（文献2）によれば、明治二十六年（一八九三）十二月、会津美里町の本郷焼工場では小型碍子一万二〇〇〇個を通信省から受注し、翌年には普通碍子二万二〇〇〇個、続いて陸軍から軍用碍子一万個を受注したと記載されている。

我が国の碍子製造は佐賀の有田焼が嚆矢で、明治二年（一八六九）に英国に人を送り技術を習得し、その後、香蘭社を設立して長期に亘り碍子の独占供給を行っていた。また、当時の軍部は薩長閥で占められ、通信省高官は佐賀藩出身者が独占していた。

戊辰戦争に敗れ、朝敵・国賊とさ



図1 電柱に取り付けられた碍子の例

れた会津に、なぜこのような国家特需が下ったのか？ 開発はどのように行われたのか？ 納品した碍子は何に使われたのか？ その裏に何があったのか？

本稿はこの謎を解き明かすと共に、この会津本郷焼碍子が日清戦争で勝敗の鍵を握る要、今流に言うところのゲームチェンジャーとして機能し、その後の通信近代化に多大な貢献をしたことを紹介する。

なお、本稿では過去の戦争の史実には言及するが、善悪を論ずることはない。

第二章 我が国の電信開発

ここで「電信」とは、「チチ キトク」などに使われる電報のことで、「トン・ツー（・）」と「―」の組み合わせ（モールス符号）を言葉に変換して伝達する通信方法である。陸上では電線を電柱に碍子で固定し、海底では特殊なケーブルを敷設することで通信が可能になる。西部劇では鉄道に並行して電柱が敷設され、ギャングが電線を切断して通信を妨害するシーンがよく出てくる。

アメリカ人モールスが電信機を発明したのは天保八年（一八三七）で、七年後の天保十五年（一八四四）にワシントン・ボルチモア間で実用電信回線が開通した。これを機に、イギリスでは蒸気による鉄道の発達と並行して電信線は全国に広がり、安政二年（一八五五）頃のクリミア戦争をはじめ、インドでのセポイの乱で電信を軍事用に使い大成功を収めた。また、アメリカでは南北戦争（戊辰戦争直前の一八六一～一八六五年）で電信が大活躍した。ペリー提督が黒船で来日した嘉永七年（一八五四）に将軍への贈り物

として電信機が持ち込まれ、一マイル離れた二つの建物間で日本初の電信テストが実施され、衝撃を与えた。

なお、国際間の電報の標準を決める万国電信連合（ITU）の設立は慶応元年（一八六五）である。

我が国の電信創業は、明治二年（一八六九）十二月の東京築地―横浜裁判所間三三キロメートルの開設に始まる。これを推進したのは寺島宗則であった。薩摩藩時代から電信に係わった寺島は、この時、神奈川県知事と外務長官を兼ねていたが、諸外国との外交交渉のために迅速・正確な情報入手の必要性を誰よりも痛感していた。

西洋ではすでに海底ケーブルが敷設され、国内電信網も整っていたことから、重要な情報は電報を使い、一日で届くのが当たり前であった。日本では、ロンドンから東京に電報を送ると、長崎までは数分で着くが、そこから東京までは飛脚便で三昼夜もかかる始末であった。海底ケーブルを武器に後進国への進出を狙うイギリスは、明治三年（一八七〇）にはインド―マレーシア―シンガポールを経て香港にまで海底ケーブルを敷設し、アジア諸国に陸揚げ拠点を確保していた。陸揚げ施設の管理運営はすべてイギリスの手で行なわれ、当然、治外法権が確保される。そこからの国内電信を後進国は自力で建設する能力が無いので、これも外国に任せるのがアジアの通例だった。

後進国は、外国の力で通信の近代化を進める代わりに、自国の通信の権利を外国に渡さざるを得なかったのである。しかし、この裏には植民地支配の狙いが隠されていた。通信（電信）の次は交通（鉄道）、次は資源開発などの産業となり、いつのまにか利権の侵略が深く進んでいくのである。

寺島は、明治四年（一八七二）にローマで開催された第三回ITU会合にオブザーバーを派遣する一方、お雇い外国人としてイギリス人ギルバートを招聘し、明治三年（一八七〇）に大阪―神戸間の電信を開通。翌年八月には東京―長崎間二三四〇キロメートルの工事に着手した。最難関は潮の流れが速い関門海峡の渡河で、自力敷設が進められた。使用した海底ケーブルはイギリスが大西洋横断に使った残品で寺島が明治四年に購入したものである。

アジアで海底と陸上の電信を自力で構築したのは日本だけである。

飯沼貞雄が電信修技教場に入学したのは明治五年（一八七二）三月で、十月には、赤間関（以下、下関）局への勤務を命じられた。下関は、郵便の開通も早く、電信事業の計画も他地域より早く進められていた。関門海底ケーブルが開通した明治六年には小倉（福岡）に転勤したが、下関も福岡も電信の陸揚げ地としての要所だった。長崎が海外との接点とすれば、下関は本州との接点である。電信の建設工事は用地の選定、確保、整地に始まり、電信柱を約五〇メートル間隔に建て、碍子を介して電信線（鉄の裸線）を固定していく（高性能の銅線が用いられるのは明治後半）。そのために、電柱にはしごを掛けて人が登り、地上では大勢で電線を引っ張りあげる。

一方、局舎内の仕事は、主に打鍵と読み取りである。電文で利用できる文字はカタカナと英数字で、文字ごとに割当られたモルス符号を打鍵する。受信した信号は紙テープにトン・ツーが印字され、これを電信技手が読み取り、手書きして電報として配達する。なお、海底ケーブルを通ってきた信号は雑音が多いため、地上線に直結はできず、一旦人手

年二月、西郷隆盛らの西南戦争が勃発した。電信は明治八年三月に熊本が開通したが、薩軍の手で破壊され、以後二ヶ月間電信は不通となった。谷干城が守る熊本鎮台の攻防はこの戦争の天王山だったが、電信は四月三十日に復旧し山川浩の必死の応援で勝利した。

九州全土を戦場にした西南戦争中、電信架設は突貫工事で進められ、七月二十八日に小倉―大分―中津、八月十日には熊本―八代―鹿児島が開通した。戦況は逐一電報で東京に報告され、新聞がこれを毎日報道した。遠い九州の出来事が翌日には手にとるように分か



図3-7 日本人が主体となって必死で架設した日本初の東京～長崎間電信回線
(黒丸は電信局、数字は開局した明治年月／西京は京都、赤間関は下関)

図3 明治期の電信敷設状況

族の乱の鎮圧の決定打となった。

明治七年（一八七四）二月佐賀の乱が勃発。熊本鎮台から山川浩少将が率いる政府軍に佐賀出兵命令が出されたのは二月八日。主謀の江藤新平が佐賀入りする三日前であった。指令は開通したばかりの電信で次々と現地に届いた。反乱軍は一時優勢となるが、先回りして情報を入手できる政府軍により間もなく鎮圧された。

明治九年十月二十八日前原一成、奥平謙輔らの萩の乱、その翌日、東京で永岡久茂らの思案橋事件が勃発したが僅か一〇日で決着した。続いて明治十

飯沼貞雄の通信省略歴					
年月日	和歴（年齢）	居住地	勤務	役職	備考
1872/08/26	明治 5(18)	東京、下関	工部省電信寮	見習い	電信寮技術等外見習下給申付候事 10/5赤間関在勤申付候事
1873/04/10	明治 6(19)	小倉	小倉局	技術主員	小倉局在勤申付候事 7/4電信寮技術等外見習中給申付候事
1874/05/04	明治 7(20)	山口	山口局	補電信寮技術二等見習	7/16山口局在勤申付候事 9/24電信寮技術等外上給申付候事
1876/06/26	明治 9(22)	神戸	神戸	補電信寮技術二等見習中給	
1877/08/13	明治10(23)	〃	電信局任工部	1/31 十等技手三級 十等技手二級	1/31電信局在勤申付候事 2/15-9/24西南の役
1878/05/22	明治11(24)	福井		11/16 九等技手二級	福井出張申付候事
1880/02/28	明治13(25)	大阪			
1881/02/21	明治14(26)	熊本		八等技手	熊本在勤申付候事、月給金22円
1884/02/26	明治17(29)	松江		七等技手	松江在勤申付候事、月給金27円
1885/03/10	明治18(30)	新潟			新潟在勤申付候事
1887/03/04	明治20(32)	東京	工務局	工務局第一課長	
1888/07/19	明治21(33)	東京	工務局	工務局第一課長	山形通信管理区出張を命ず
1889/07/30	明治22(35)	〃		工務局第二課代理	工務局第二課勤務
1890/07/01	明治23(36)	〃	電務局	電務局第二課長	6/28給上級俸 23回忌で飯盛山に白虎隊士の墓建つ
1891/03/31	明治24(37)	広島		広島電信建築区電信建築長	広島電信建築区電信建築 長を命じられる
1892/12/31	明治25(38)	東京		第一部 担当主任	11/30東京電信建築署在勤を命ず
1893/11/10	明治26(39)	〃			東京郵便電信局在勤ず 12月通信省から小型碍子1万2千個受注
1894/06/28	明治27(40)	釜山(朝鮮)	大本営附	第一電線架設技隊 技術部総督	8/1日清戦争おこる。2/5給二級俸 6/26朝鮮国派遣を命ず 6/28宇品を発し6/29釜山に着す
1895/08/02	明治28(41)	東京	逓信省	東京郵便局電信局 在勤	掃部命令。8/28仁川を発し8/29下関着 戦役の功により、勲七等に叙し 青色桐葉章及び金60円を賜わる
1896/04/15	明治29(42)	〃	通信局		当分の内通信局勤務を命ず
1897/04/30	明治30(43)	仙台		仙台郵便電信局建築課長	仙台郵便電信局建築課長を命ず 十一級俸
1900/9/28	明治33(46)	〃		叙高等官六等 12/27叙正七位	6/25八級俸下賜
1903/4/1	明治36(49)	〃		仙台郵便局工務課長	六級俸下賜、7/16叙高等官五等 11/10叙従六位
1905/1/16	明治38(51)	札幌	逓信省	札幌郵便局 工務課長	8/8五級俸下賜
1906/9/16	明治39(52)	〃			長男一雄陸軍工兵少尉正八位勲六等、 日露戦役に出征。帰国後区立病院にて 病死。10/2叙正六位
1907/3/9	明治40(53)	〃			4/1授受雙光旭日章及び 金四百円を賜わる 4/22四級俸下賜
1909/	明治42(55)	〃			
1910/4/1	明治43(56)	仙台		仙台通信管理局工務部長	三級俸下賜、通信管理局技師 叙高等官四等
1911/12/11	明治44(57)	〃			叙従五位 12/26叙勲四等授瑞宝章
1912/	明治45(58)	〃			
1913/5/31	大正 2(59)	〃		6/9休職	二級俸下賜、叙高等官三等

図2 飯沼貞雄の通信省略歴

による打ち直しが必要であった。図2に飯沼貞雄の通信省略歴を、図3には明治期の電信架設状況を示す。貞雄の勤務地は下関（明治五年）↓福岡↓山口↓神戸↓東京↓大阪↓熊本↓松江↓新潟↓広島↓東京（明治二十五年）と変わるが、これは日本の電信架設の道程と一致することが分かる。

また、山口、福岡、佐賀局は明治六年十月に開局したが、これらがその後

る。電信の威力は軍部だけではなく、国民に広く理解されるようになっていった。

第三章 我が国の朝鮮進出

西南戦争で国内統一を果たしたあとの日本政府の重要政策は殖産振興と軍備の拡張であった。幕末に締結した不平等条約は関税自主権、治外法権、為替レートに関して我が国を二等国扱いにしたもので、その改正は岩倉使節団の米欧派遣以来、政府の悲願だった。鹿鳴館で派手なパーティを開催し外国要人に文明国振りを訴えてはみたものの、コトはそう簡単には進まなかった。

一方、隣国の朝鮮および清も幕末の日本と同様に欧米（特に英・仏・露）から開国を求められ苦慮していた。我が国と朝鮮・中国の間には遣唐使などを通して古くから交流があったが、豊臣秀吉の朝鮮征伐で関係が悪化し、維新後明治政府が国交再開を働きかけたが朝鮮に拒絶された。また、中国は朝鮮を属国と見做し、朝鮮は日本を蔑視する一方、朝鮮内には守旧派（親中国派）、開化派（国王高宗派）、独立派（鎖国派）が対立して混乱状態となった。

このような中、明治九年（一八七六）日朝修好条規が国王高宗との間で締結され、①朝鮮を日本と同等の権利を有する独立国として認める。②両国が相互に首都に公使を駐在させる。③釜山他二港（元山、仁川）を開港する。④自由貿易の原則。など二三条が定められた。

この時期にアジア外交に当たった人物として、榎本武揚と大島圭介がいた。榎本も大島も戊辰戦争では会津派であり、義を重んじた人物である。榎本は明治七年（一八七四）、

ロシア特命全権公使としてロシアとの領土問題処理に当たり、明治八年に樺太・千島交換条約に調印した。その後、明治十五年（一八八二）に駐清特命全権公使となり、中国の李鴻章との信頼関係を深め、朝鮮における電信の権利獲得に邁進した。翌年三月に「日朝両国間海底線設置に関する條款」を締結し、釜山陸揚げと釜山日本電信局設置を承諾させ、これに二五年の独占権を付与させるのに成功した。

日本がITUに正式加盟したのは明治十二年（一八七九）と早く、中国（中華民国）は四二年後の大正九年（一九二〇）、韓国は実に七四年後の昭和二十七年（一九五二）である。当時は清も朝鮮も独自で電信設備を架設する技術はなく、全て外国（英国）任せであった。朝鮮を属国と見做す清は明治十八年（一八八五）に国境の義州（鴨緑江に面する現北朝鮮平安道）から京城（現韓国のソウル）までの電信線を勝手にひいてしまった。これは明らかに条約違反であり、日本はこれを認める代わりに釜山―京城線を朝鮮政府の責任で作らせることにした。もっとも、朝鮮は独自で電信架設する能力はないので、日本がこれを行す腹案があった。

榎本は明治十八年に天津条約（日清両国は朝鮮の内乱鎮圧のため派遣した軍隊を即時撤退させることなど）に調印した。帰国して直ぐに内閣制度が発足すると、初代総理大臣伊藤博文の下で通信大臣となり、明治二十一年（一八八八）、電気学会創立と共に初代会長を務め、以降農商務大臣、文部大臣を歴任した。

これらの経緯を通して日朝貿易は拡大し、明治十五年（一八八二）には釜山に二〇〇〇人の日本人が駐在するようになった。駐在者の安全を確保するため、日本は明治十六年（一八八三）に浪速型防衛巡洋艦（排水量二七〇〇トン）二隻を当時世界最高とされるイ

ギリスのアームストロング社に発注し、三年後に就航、二番艦「高千穂」もほぼ同時期に就航した。一方、清はほぼ同時期に主力艦「定遠」（排水量七二〇〇トン）をドイツに発注し、就役後明治十九年（一八八六）に示威を兼ねて朝鮮、ロシア、日本に寄港、我が国に大きな脅威を与えた。

大鳥は明治五年（一八七二）二月よりアメリカ、ヨーロッパを視察し、明治九年に工寮美術学校（東京芸術大学の前身）校長を兼務、明治十年（一八七七）には工部大学校（東大工学部の前身）校長、明治十九年（一八八六）に第三代学習院院長、明治二十年に華族女学校（女子学習院の前身）校長兼任と我が国の高等教育の全般に係わった。明治二十二年には清国全権公使となって、清国との関係改善につとめ、続いて明治二十六年（一八九三）からは朝鮮全権公使兼務となって、精力的に国交正常化に務めた。大鳥の基本方針は条理外交（国際法に準拠した筋を通した外交）の展開であり、天皇も穏健な外交を望んでいた。天津条約から九年後の明治二十七年（一八九四）五月、東学党（独立派）の率いる農民軍の内乱は朝鮮史上最大規模に拡大した（甲午農民戦争）。東学とは西学（西洋キリスト教や儒教）に対抗する思想で、朝鮮からの外国人排斥と内政改革を主張した。駐在する外国人は生命の危機に晒された。朝鮮政府はこの内乱鎮圧に手を焼き、日本と清国に派兵を要請した。朝鮮には農民軍、政府軍、日本軍、清軍の四つの軍が集結し一触即発の危険な状態となった。日本は派兵の見返りとして、朝鮮政府に主要都市間の電信架設および鉄道建設の支援を申し出た。（文献6）。当時、京城（ソウル）と釜山間に清国がひいた電信線は英国製であるが、メンテナンス体制が無いため故障続きで使い物にならず、日本が電信架設する以外に選択肢がなかったのである。

第四章 会津本郷焼碍子の軍用調達!!

以上の日・朝・清の政治的駆け引き（特に朝鮮での電信架設）の背景をもとに、『会津碍子の官需への採用についての一考察』（宮地著、文献1）、『会津本郷焼の歩み』（文献2）、『白虎隊士飯沼貞吉の回生』（筆者著、文献3）、および飯沼貞雄の逋信省略略歴（図2）を参考にして、逋信省や陸軍から電信用碍子を大量受注したいきさつについて筆者の推論を以下に紹介する。

結論は会津本郷焼の軍用電信碍子の開発指導や受注・発注の仲介に飯沼貞雄が直接かわり、日清戦争時の朝鮮での電信敷設の責務を全うしたということになる。なお、筆者の調査では受注の記録は文献2が唯一であり、発注側の記録は発見できなかった（文献1は状況証拠から飯沼貞雄が中心人物としている）。また、文献2は大量受注後の地元の語り伝えが中心で、例えば「旧来日本の製陶地では碍子を造ったことが無い」などということんでもない誤解も散見されるので注意が必要である。

飯盛山で自刃し一命をとりとめた白虎隊士飯沼貞吉（後貞雄に改名）は一八歳で工部省（後、逋信省）に入省した。明治五年から全国の電信架設に係わり、明治二十年に東京工務局第一課長、明治二十一年に同第二課長代理、明治二十三年には電務局第二課長を務め、明治二十四年広島電信建築区電信建築長となり、明治二十五年、二十六年は東京電信建築署勤務、そして明治二十七年六月二十八日付けで大本営付となり四〇歳の時に朝鮮に派遣

月	日	職名	備考
明治二十一年	三月十一日	叙判任官五等	全
明治二十一年	三月廿日	免兼官	全
明治二十一年	九月九日	工務局第二課長ヲ命ス	全
明治二十一年	九月九日	逓信省工務局次長志田林三郎九連信	全
明治二十一年	九月九日	管理區巡回付随行ヲ命ス	全
明治二十一年	九月九日	大坂岡山未開闢松江熊本	全
明治二十一年	九月九日	金貳拾円右事務勉勵超衆付慰勞ト	全
明治二十一年	九月九日	シテ給與ス	全
明治二十一年	七月九日	山形逓信管理區出張ヲ命ス	全
明治二十一年	七月廿日	級中給俸	全
明治二十一年	七月廿日	金拾五円右事務勉勵超衆付慰勞ト	全
明治二十一年	七月廿日	シテ給與ス	全
明治二十一年	四月廿日	除服出仕ヲ命ス	全
明治二十一年	七月十八日	工務局第二課長ヲ免ス	全
明治二十一年	七月廿日	第二課勤務ヲ命ス	全
明治二十一年	九月三日	工務局第二課長吉田正秀不在中代	全

図4 飯沼貞雄の官歴書の一部（明治21年山形出張）

された。

第三章で述べたように、清は我が国の抗議にもかかわらず、明治十八年（一八八六）に朝鮮に強引に電信設備を架設すると共に、明治十九年には巨大戦艦「定遠」を就航させ日本を威嚇した。この時期は日本政府として朝鮮への電信網敷設は喫緊の重要課題であり、貞雄はこの命題の解

決策として会津本郷焼碍子に着目した。

文献1によれば会津碍子試作の開始は明治二十一年（一八八八）となっているが、この年は貞雄にとって特別であった。

明治二十一年七月十五日、会津磐梯山が大規模な噴火を起こした。裏磐梯に景勝地として名高い五色沼が形成されることになったのはこの噴火による。

官歴書によれば、貞雄はその四日後に山形逓信管理区へ出張を命じられている。

当時は鉄道が開通していなかったので馬車を使ったと思われるが、東京から山形に行く

には会津経由で行くのが便利である。自刃後一度も故郷に戻らなかった貞雄は、家族のこゝとに加えて噴火のことも気がかりだったので途中会津若松上六日町の飯沼家も訪ねた。これは、従兄の山川浩と貞雄の母ふみが交わした下記の歌が飯沼家に残されていることから分かる。

旅衣 立わかれても武蔵あぶみ かけてそ頼む 又のあふせを 玉章（ふみ）

武蔵鐙 かけはなれても君に又 あひづの山は 近くこそあれ 屠竜子（浩）

鐙は乗馬する時の足置き台のことで武蔵鐙は、勇猛な武人を表現する歌言葉である。武蔵鐙は浩にピッタリの表現だった。叔母のふみにこう歌われ、浩もこれを自認して、返しての会津に「逢う」をかけたのである。（文献3参照）

貞雄は故郷会津への恩返しと自刃失敗の汚名返上も兼ねて、この機会を逃さなかったに違いない。両親に再開後、直ちに会津本郷焼工場を訪ね電信用碍子の話を切り出したであろう。

文献2の「会津碍子の開拓者たち」の冒頭には次のように書かれている。

会津碍子と日清戦争は深い因縁がある。「勝った！勝った！」で勝ち進んだ日本軍は、前線と後方基地連絡用の電信線を架設するために大量の碍子が必要になり、会津本郷碍子の大量生産の道を踏み出させた。

しかし、電信未経験の会津で本郷焼を電信用碍子として官庁に採用させるには①内々の試作テスト、②通信省での評価、③対香蘭社優位性の実証、④軍事機密の順守、⑤量産体

制の確保、⑥薩長閥対応などの周到な準備が必要である。

『会津本郷焼の歩み』（文献2）に登場する人物は、本郷で製造にかかわる者として水野喜三他三名、東京で販売にかかわる者として山田恒三郎他二名、会津と東京の両方に係わる者として樋口彦四郎（白虎士中一番隊で戦った貞雄の戦友）、通信省の役人として飯沼貞雄、そして興味深い人物として山川浩が記載されている。

貞雄は本郷焼工場の水野喜三に内々のテスト品の試作を依頼する戦略を練った。電信用部品調達は通信省大臣官房調度課の管轄で、製造所長は仇敵の元鹿兒島藩士森長保高等官である。香蘭社碍子との比較優位性を余程明確にしなければ成功はおぼつかない。貞雄は以下の三点に的を絞った。

①対候性…朝鮮は気温変動が日本の二倍と激しいため、碍子が破損し易く障害を起こせば軍事作戦の致命傷になるが、会津は佐賀より気温変動が激しいので対候性の優れた碍子を製造できること。

②秘密保持…商用碍子生産中の佐賀より無名の会津の方が秘密保持を徹底し易いこと。

③価格優位性…一般に焼き物は素焼きと浸水を防ぐ本焼きの二工程が必要だが、本郷焼は手間のかかる本焼き工程無しで製造できるので製造コストを低減できる（文献1、文献2）。

電信に精通し緊迫の度合いを強める日朝外交の趨勢を肌で感じた貞雄は開発品の性能目標と工程表を設定した上で、水野に試作品を作るように依頼したことであろう。勿論、この段階では本件が秘密事項であることを念押しした。

貞雄は本郷町での密談を終えると会津若松を発ち、出張目的の山形県内の酒田電信局を目指した。局長は白虎隊隊長日向内記の長男日向真寿見だった（真寿見は後に朝鮮出征に同行する）。

その後、テスト品が出来る毎に改良を続けその性能を確認した上で、二年後の明治二十三年（二八九〇）に貞雄は本郷に碍子一〇〇個を試作させ通信省に寄付することにした。

このテスト用の寄付品は、目論見通り通信省で高く評価され、翌明治二十四年にはいよいよ量産の段階にきた。

残る問題は薩長等の派閥問題である。貞雄は通信省の職員であり、自作自演は嫌われる。そこで、この話は明治二十三年に貴族院議員になった山川浩に頼むことにした。なお、文献2では山川浩がテスト品を寄付したとなっているが、試作段階のこの場面で山川が関わるはずはなく誤解であろう。

山川は戊辰戦争で会津軍の総指揮官を務め、敗戦後の明治十年（一八七七）には西南戦争で政府軍に加わり、明治十九年（一八八六）に陸軍少将に昇進し、陸軍の現役軍人ながら、東京師範学校長（のち東京高等師範学校長）を兼任した。弟の山川健次郎は後の東京帝大総長で山川兄弟は貞雄の従兄弟に当たる。

山川浩は教育に熱心で明治二十一年（一八八八）には森有禮文部大臣と直談判し、無試験で旧制高校へ入学できる制度実現に成功した政界のやり手であった。また明治二十二年三月には衆議院議員選挙に出馬するため、会津で「独立党」を組織し、演説会では、「東北人は世にあれども無きが如し、是非会津魂を振興して関西人の奴隷たらず、即ち独立党

を立てんと」と主張するなど会津の復興に特に熱心だった(文献4)。選挙には落選したが、翌年九月に貴族院議員に選任されたのである。

山川浩はこの官庁への仲介役を快諾した。筆者には「俺に任せておけ」という山川の声が聞こえてくる。

明治二十六年(一八九三)十二月、会津本郷焼工場では逓信省から小型硝子一万二〇〇〇個を受注したが、この受注取引は東京で陶器業を営んでいた山田恒三郎が担った。

一方、樋口彦四郎は白虎士中一番隊で戦った貞雄の戦友であるが、東京に電磁器卸専門の樋口商店を設立し、陸軍発注の本郷碍子を一手に引受けた。なお、文献2には受注に成功した後、「山田恒三郎・飯沼貞雄・樋口彦四郎らが集まって痛飲した」と書かれている。本成功の立役者はこれらの三名であろう。積年の艱難を克服した彼らの思いが目に浮かぶ。

この時期、政府は朝鮮に持ち込む電信用機材の調達に必死だった。電線と電柱の調達は簡単だが、碍子は戦略品である。会津碍子は人・物・技術の三拍子揃ったお買い得品であり、政府にとって正に渡りに船だった。

一方、納入側の会津では、「製品ができると陸軍からは矢のような催促で幾度か東京と本郷を往復した。当時郡山―上野間は鉄道があったが、磐越西線が無いので本郷―郡山間(約六〇キロメートル)は人海戦術による徒歩。しかも豪雪で難渋した。また、後払いなので資金繰りも大変だった。人足の急募ではお国の御用だとして村長さんに力を貸していただきました。(文献2を意識)」と使命感が伝わってくる。

なお、会津碍子は日清戦争終了後は、電力用の高压碍子市場に向かうが、日本碍子(愛知)などの市場競合が激しく次第に衰退していった。また、九年後の日露戦争では無線電信が主力となったため、電柱に取り付ける電信用碍子の出番は無くなった。

第五章 朝鮮への電信架設と日清戦争

本章および第六章は『白虎隊士飯沼貞吉の回生』(文献3)を元に加筆・修正・再編集したものである。

明治二十七年(一八九四)六月五日に参謀本部内に大本営が設置され、参謀総長有栖川親王が総責任者となり、天皇による親征体制が確立した。

貞雄に出征命令が出たのは明治二十七年六月二十五日であった。貞雄はこの日が来るのが近いことは分かっていただであろう。土族の乱で最前線の電信架設に当たってから一七年、今や電信の正確性と確実性は元より、秘匿、障害復旧などの運用技術が外交および軍事の要になっていた。

釜山上陸

貞雄が残した『従軍中の略歴』(文献5、明治二十八年)によれば、「大本営から出発の期日は、明治二十七年六月二十八日午後九時五五分新橋発の汽車で広島まで直行、そこから軍艦に乗り込むことに決定した」との連絡が入った。臨時野戦電信部を組織し、逓信省

架設枝隊技術部統督の辞令を交付された。

その翌日、広島港を発し、七月二日釜山へ上陸した。釜山は総領事館電信局等を含んで五〇〇〇人からの日本人が住む居留地であった。

当時の朝鮮全権公使は大鳥圭介。釜山から京城までの陸上電信線は一ヶ月も前から故障したままだった。京城―釜山間の連絡は四隻の汽船を報知艦「八重山」の護衛のもとに二隻ずつ分けて毎日入れ替わりに電報を運んで往復する方法をとっていた。当時清国には「定遠」「靖遠」「鎮遠」等の世界第一線級の軍艦（排水量七二〇〇トン）が揃っていた上、西海岸にはすでに清の軍隊が上陸していた。内地との唯一の連絡地だった釜山をたたかれたら、すでに仁川や京城に入っている日本軍との通信は絶たれてしまう。釜山電信局は実にこの重要な通信の中継所だったのである。

これに対して、日本政府から大鳥へ次のような指示が出ていた。

「朝鮮政府に京城―釜山間の電信線を修復させること。もし、受け入れないようであれば、我が陸軍がその工事を担当し、その事を朝鮮政府に通報する事」

大鳥は政府の指示に従って朝鮮政府に粘り強く交渉したが、朝鮮政府は一向に修理に乗り出さないばかりか、「工事は一国の主権に属し、外国にさせることは出来ない」として日本の提案を拒絶した。そこで、工事は日本の責任で着手することに決定したのである。（文献6）。

七月二十二日、貞雄は第一電線架設枝隊より分離し、釜山―大邱間（九〇キロメートル）の電線架設担当を命ぜられた。大邱は京城、釜山、仁川に次いで韓国で四番目の都市で、釜山―京城間（三八〇キロメートル）内陸道の途中、日本でいえば名古屋のような立ち位

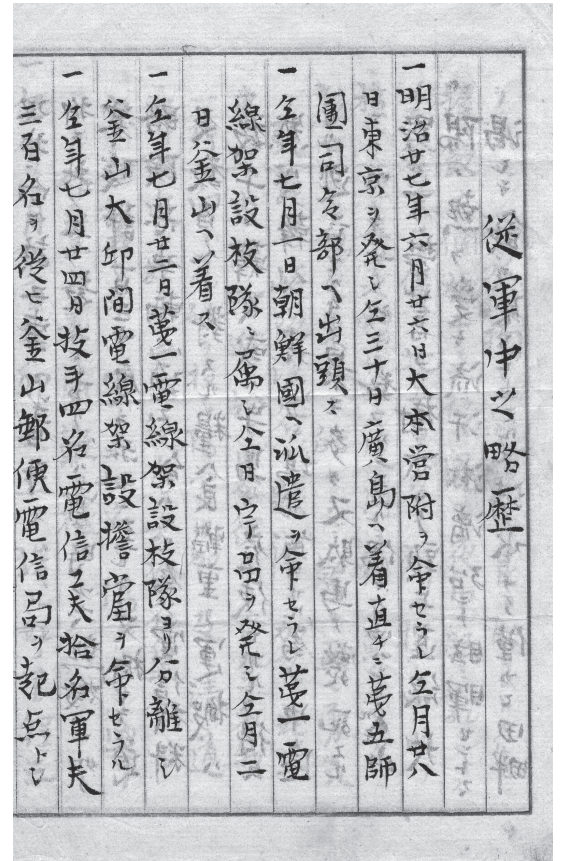


図5 貞雄が残した『従軍中の略歴』

から技師、書記、電信作業員など、合計七八名を出し、これに広島からは兵士と陸軍工兵士三名を加えて一隊とし、貞雄は技術部統督として士官相当の待遇を受けることに内定。広島の司令部からは大本営付きの辞令が交付されることになった。

貞雄は同日付けで弟関弥宛に以下のような要旨の手紙を出した。

もし万一のことがありましたら、私の妻子のことをよろしくお助けください。遺子が成長するまでは政府扶助金を一雄と浦路の教育などに充ててください。もうこれ以上遺言状などは差し上げられませんのでご理解ください。

追伸、「大本営指令は軍事上の極秘ですので、お含みおきください」。

広島に到着したのは六月三十日、直ちに第五師団司令部へ出頭した。師団長は野津道貫（幕末の薩摩藩士・後の日露戦争第四軍司令官陸軍大将）で、貞雄は大本営付き第一電線

置にある。

「飯沼貞雄翁の電信線架設に就いて」（文献7）に、昭和十五年（一九四〇）十月七日付け読売新聞に掲載された以下の記事の紹介がある。

当時は遠距離間情報伝達を瞬時に実施する唯一の方法が電信であった時代。電信は軍事の優劣を決定づける技術として時代のエポックメイキングとなった。日清戦役における電信の労苦と感激を当時釜山の電信局にあって通信省派遣電信技士として活躍したオペレーター八木鐘次郎翁（当時七十一歳）が語った。

白虎隊の生残り

二日前の朝、京城―釜山間に日本人の手で電信線を架設するために乗り込んで来た男は飯沼貞雄だった。五名の技手と一〇名の工夫、人夫三〇〇名を引き連れて到着するとすぐ、京城めざして発って行った。敵地の真つ只中に飛び込んで行くも同然だった。技手や工夫達がみんな洋服の上に日本刀を背負っているのに、飯沼だけは普通の背広姿で、広島を出る時さんざん勧められて持って来た手槍を一本、供の人夫に担がせているきりだった。「私は白虎隊で死んでいるはずの人間です」飯沼はピストルを持って行くようにすすめる私の言葉に答えて笑った。飯沼は白虎隊生残りだった。「命は捨ててますよ」電信局の玄関を離れる時そう言うて正面に掛けてある「大日本帝国郵便電信局」の横文字で書かれた金文字をじっとみつめていた。「元氣で行って来ます。きつとやりとげますよ、船を使わんでも東京と通信が出来るようにして見せますよ」ヘルメットをぬいだ

飯沼は、電信局の門のわきに立っている日の丸を仰いで明るく言った。そうして飯沼貞雄の一隊は二日前、決死の電信建設行に旅立ったのだ。

『讀賣新聞』（昭和十五年十月七日）



図6 日清役電信架設記事（読売新聞）

電信架設

朝鮮での電信架設作業は国内では想像できないような困難に見舞われたようである。貞雄書『従軍中の略歴』を以下読み下し文で紹介しておく。

まず何よりその暑さであった。じりじりと焼けつくような炎天下、温度計は何と一三〇度（五四℃）を示した。また、道路の状態が非常に悪く車輛の通行が不可能だったため、電信資材や作業員ら数百人分の糧食の運搬は数千の韓人あるいは牛馬を雇使せざるを得なかった。しかし、韓人はやる気がなく途中で逃亡する者が後を絶たず、また馬も一日に一〇頭くらいの割合で斃れ、使いものにならなかった。太陽の熱が容赦なく照りつけ、めまいがするほどで、のどの渴きを癒そうにも飲み水になりそうな清水はなく、濁った水を口にするしかない。赤痢にならないことを祈るばかりである。食事も握り飯二個と梅干し二粒にすぎず、夜眠る場所にも事欠く有様だった。建物がないので、草の多い場所を選び、そこに身を横たえるのだが、毒虫に皮膚を刺される。悪疫にでも罹ったら大変だから緊張の連続でよく眠れないうちに空が明るくなってくる。

そこで再び勇気を奮い起こし、険しい山道や溪谷を進んで作業にあたるといいう苦しい日々が続いた。それに加え、この工事中、密陽付近においておよそ一〇〇余名の暴徒が我々一行に対して瓦礫を投げ、また清道付近でも六〇名ほどの暴徒が突然襲いかかり、軍夫二名に傷を負わせる等の妨害行為を行なった。

清国は朝鮮での主権は自国にあるとして、日本軍の進出を排除するべく露骨な作戦を展開してきた。そして、明治二十七年七月二十五日、朝鮮西海岸の豊島沖で海戦に火蓋が切られ、不利と見られていた日本の海軍が初戦を制したのである。

釜山電信局から本国に送るその最初の勝報を打電した八木鐘次郎は次のように書きとめている。

「勝報を聞いて胸は感激で張りさけそうだった。打電する手が震えた。まもなく松村局長以下五人の電信係も集まって来た。

『バンザイ、バンザイ』

歓呼の声は更け行く釜山湾にこだました。感激はひとしおだった。

馬鹿馬鹿しい程涙があふれて来た。

宣戦布告

明治二十七年（一八九四）七月三十日、牙山戦で大島義昌が率いる混成旅団軍が清国三五〇〇の軍勢を破り、清国を撤退させると、二日後の八月一日、日本は「朝鮮独立の支援」を目的として遂に清国に対し宣戦布告した。日清戦争の開始である。

八月九日、支那兵の先鋒がすでに平壤に集結、後続兵は鴨緑江（清と朝鮮の境界を流れる大河）を渡りつつあるとの情報を得て、大島隊は騎兵を平壤に差し遣わすことに決したという。しかし翌日、韓人の妨害のために平壤と京城間の電線架設は見合わせざるを得なくなったという報告が入った。異国の地に乗り込んで、コトが簡単には進まないのは当然だった。

八月十一日、第五師団が大邱に到着。貞雄は十三日に釜山―大邱間の電信工事を完成させると、直ちに大邱と洛東間六〇キロメートルの架設を開始した。その後、釜山―元山間、

および元山―京城間の電信を開通させ、野津第五師団長に報告した。

作業は着実に進められたが、戦時は思わぬところで戦況に変化が起こるものである。八月二十三日から二十四日にかけて、東学党三万人が再蜂起し、日本軍の一名が戦死した。八月二十六日、大鳥公使は遂に日朝両国盟約の調印に漕ぎ着けた。これは「日本は朝鮮の独立を認め他国からの侵略を防衛する」という内容で、当初から（明治九年締結の日朝修好条規）の基本方針である条理外交を貫き、諸外国に対して「日本の宣戦布告は侵略戦争を目的としたものではないことを日朝両国政府が公式に確認した」という意味で極めて重要だった。（文献6）。大鳥の粘り強い交渉が結実したのである。

ところが、**朝鮮は盟約に調印する裏で清国にも手を回していた。**

九月八日、貞雄は中路兵站電線架設隊所属となった。九月十三日には第一軍第三師団山縣有朋が京城に入り、京城から二〇〇キロメートル先の平壤（現北朝鮮の首都）へ向った。日本軍は九月十五日、平壤に一万二〇〇〇人を集結させた清国軍を総攻撃し、陥落させた。貞雄はこのことを洛東の観水楼で知った。

この日、日本では明治天皇が戦争指揮のため広島に入り、大本営も広島に移った。

続く九月十七日、黄海海戦で清国艦隊を撃破。この勝利により、日本は黄海・朝鮮の制海権を握った。

日清戦争の拡大

貞雄は明治二十七年十月一日付で中路兵站電線架設隊技手長を命ぜられ、軍は平壤から平安道を経て、鴨緑江を渡り中国遼寧省へ向かった。連戦連勝で勢いづいた日本軍に国民

は酔った。

「この際、獲れるものは取ってしまえ」という意見が支配的になった。

そして、条理外交にこだわる大鳥公使に不満が集中した。そこで、十月十五日、政府は大鳥を更迭し、長州出身の井上馨を送り込んだ。朝鮮独立の支援を目的として開始した日清戦争は、侵略戦争へと路線を変更したのである。このことは、後年日本の歴史に暗い影を落とすことになった。

十一月一日、中路兵站電線架設隊は解隊となり、臨時南部兵站電信部が置かれ、貞雄は電信部技手長を命ぜられた。南部とは中国黄海側を指す。中国遼東半島突端の旅順、大連に向けて軍隊が南下するのに備え、兵站部も南部に進出した。

その旅順で、十一月二十一日、日本軍は六万人の無差別大虐殺を行なった。最早、日朝同盟の理念は風化し、勝つためには手段を選ばなくなってしまったのである。

アメリカの新聞がこの大虐殺を報道し、ニュースは瞬く間に全世界に広まった。日本の言う「条理外交」は侵略戦争をカムフラージュするための見せかけでしかない。諸外国は一斉に日本に疑いを持ち始めた。アメリカとの不平等条約の改正交渉が難しくなったのは当然であり、後の三国干渉の口実を与えることになった。

第一軍司令官山縣有朋は更に進んで北京攻略を企てた。その暴走を恐れた天皇は、山縣を本国に召還し、戦争終結に向けて動き出した。十一月二十九日のことである。年が明け、明治二十八年二月十二日に清国北洋艦隊が降伏すると、十九日には李鴻章が講和全権に任命された。

電信架設での貢献を評価された貞雄は、明治二十七年十二月二十六日、勲八等に叙せられ、瑞宝章を賜った。そして翌年三月四日、臨時南部兵站電信部技長心得を命ぜられ、高等官（幹部）の待遇を受けることになった。任地は平安道瀧川（遼東半島の付け根、鴨緑江の入り口）であった。三月三十日、同僚の電信技士日向真寿見（白虎隊隊長日向内記の長男）が同地で疫病（マラリア）で死亡した。

戦争の終結

日本側が伊藤博文と睦奥宗光、清国側が李鴻章を全権に任じ、下関で講和会議が開始されたのは、明治二十八年（一八九五）三月二十日のことであった。条約交渉が開始されて間もなく、小山六之助（群馬県出身、自由党議員の息子）が李を狙撃し重症を負わせるというとんでもない事件が起った。交渉を有利に進めようとしていた矢先のことである。日本は再び「野蛮国」の烙印を押されることになった。政府は急遽休戦条約を締結し、コトを納めるしかなかった。

四月十八日、日本と清国は下関の春帆楼で講和条約を締結。これに反発するロシアは、ドイツ・フランス両国の力を借り、二十三日、遼東半島を清国に返還することを日本政府に求めた（三国干渉）。日本はまだ西欧の列強三か国に対抗する力はなく、五月四日に遼東半島の全面放棄を閣議決定した。返還の代償に多額の賠償金を得た政府は、これを日清戦争での戦費の一部に充て、残りを軍備拡張費や電信・鉄道事業費、台湾への進出などに使用した。

帰国

貞雄は明治二十八年八月二日に帰国を命ぜられ、八月三日付で東京郵便電信局勤務の辞令を受け取り、二十七日に仁川から龍山を経て二十八日汽船「龍山丸」で下関に向かった。その日は霧が深く韓国人を含めて七〇名も乗船したため、出航直後に船が転覆し溺死者が多数でた。貞雄は、書き溜めていた資料や日記を全て流失するという災難に見舞われたが、幸いにも救助船に乗り移ることができ、二十九日に無事下関に到着した。当局に提出した「転覆の状況説明書」が飯沼家に残されている。

帰国してみると、国内は戦勝気分一色だった。旅順大虐殺のことは殆ど誰も知らなかった。三国干渉に屈し、遼東半島を返還した政府の弱腰を指弾する論調ばかりが目立った。

第六章 日露戦争と無線通信

話は遡るが、欧州列強の植民地政策は一八八〇年代（明治十年代）にアフリカとアジア分割をほぼ完了していた。すなわち、アフリカに関しては、イギリスはエジプト、南アメリカ、スーダンなど、フランスはアルジェリヤ、チュニジア、モロッコなど、ドイツはカメルーンなどを植民地化した上、ベルリン会議などで相互にこれを承認し合うという勝手放題がまかり通っていた。

アジアについても同様で、イギリスはインド、マレーシア、ビルマなど、フランスはベトナム、カンボジアなど、アメリカはフィリピンを領有していた。

彼らの次の分割目標は中国、朝鮮、日本を含めた東アジアであった。イギリスは香港から新界へ、フランスはカンボジアからラオスへと駒を進めていた矢先、日清戦争が勃発し、小国日本が大国清に勝つという信じられない事態が起こったのである。

日清講和条約の内容に「遼東半島割譲」が含まれていることに驚いたロシアは、ドイツとフランスを巻き込んだ三国干渉を展開し、これを撤回させることに成功した。干渉の理由は、「日本の遼東半島領有は清国の首都北京を脅かすだけでなく、朝鮮の独立を有名無実にし、極東の平和の妨げとなる」というものだった。「朝鮮の独立」を掲げたのは日本であり、他国は朝鮮の属国化を狙っていたのである。

アフリカ、アジアで獲物を殆ど手に出来なかったロシアは、その後、極東への南下と植民地化政策を露骨に開始した。ロシアはベーリング海峡を渡って、アラスカはじめ北アメリカ大陸に植民地化の手を伸ばし、一時はカリフォルニア州あたりまで南下してきた。これが失敗に終わると、満州に鉄道を敷設する権利を獲得し、シベリア鉄道を遼東半島にまで延長し、旅順を軍港化し、一八万人もの軍隊を送り込んできた。ロシアのやり方は占領地に多数のロシア人を移住させ、現地でその子供を生ませて、居座ってしまうという陰險な政策であった。そして、その矛先は日本領の千島列島（北方四島を含む）などにまで向けられた。

三国干渉以来、いずれ、こういった状況になることを危惧した日本政府は、臥薪嘗胆を合言葉に、ロシア対策を辛抱強く進めてきた。真っ先に、陸・海軍の強化が図られた。海軍では特に兵士の徹底した基礎教育と連合艦隊の陣形模擬訓練などが行われた。陸軍では工兵隊の専門別組織化と教育訓練が行われた。工兵隊の任務は、渡河・架橋、道路造成、

塹壕・坑道・築城、電信、手榴弾・迫撃砲の現地製造など多岐に渡った。これらに必要な物資は現地調達が原則である。未だ見ぬ戦地で、知らざる敵と戦うことを想定して訓練を繰り返した。ドンパチを開始する以前に守備と攻撃の態勢を臨機応変に整えなければならぬ。工兵隊の現地での対応力が勝敗に大きく影響する。量でロシアに勝てない日本軍は個々人の技量を磨くことで、質で対抗したのである。

電信網の敷設と情報戦略

しかし、常備兵力で日本の約一五倍という強大なロシアを相手にまともに戦っては勝ち目がない。陸と海を繋ぐ第三の柱、それは情報戦略だった。これを実行したのは陸軍参謀となった児玉源太郎（徳山藩出身）だった。熊本鎮台で谷干城を助け籠城戦を戦い抜いた児玉は情報の重要性に目覚め、来るべき想定海域に日本独自の通信網を構築するべく、一〇年越しでこれを強力に推進した。

情報力でロシアを圧倒する！

陸と海を電信と電話で繋いで即戦に耐える情報網の構築を目指した。歴史上初の作戦だったが、後進国日本が独力でこれを実行できるとは列強国の誰も信じなかった。

明治二十八年六月、児玉はまず海底ケーブル布設船「沖縄丸」の建造に着手する。次に着手したのが広大な貯線槽の建設だった。海底ケーブルは太く、重く、長大であり、特殊な設備を備えない限り出し入れさえできない。調達先はイギリスしかなく、納期は六ヶ月以上、発注行為が目立てば怪しまれる。三年〜一〇年後の使用を見込んで少しずつ入手し貯蔵するためだった。

明治二十九年（一八九六）二月に「沖縄丸」が竣工すると、直ちに大隈半島から沖縄までの海底ケーブル布設にかかり、八月にはこれを完成させ、更に沖縄から台湾までの布設にとりかかり、明治三十年五月には大隈半島から台湾までの九六九海里（約一八〇〇キロメートル）を日本人の手で完成させた。こうして、九月には「沖縄丸」と通信線は逓信省に移管され、商用回線として使用開始された。なお、日露戦争に投入された海底ケーブルはその後の追加分を含め、二九〇〇海里（約五四〇〇キロメートル）という。

そして、明治三十一年十二月に台湾―福建省（中国）間の海底ケーブルの買収に成功した。長崎―釜山およびウラジオストク（ロシア極東の玄関口、新潟から八〇〇キロメートル）間の海底ケーブルは、ロシアに通じた大北電信会社からの借用である。陸揚げ地ではすべての電文が一旦人手で解読され、再打電されるので、機密情報は扱えない。戦争になり海底ケーブルが切断されれば、情報は不通となる。大陸に通じる独自の迂回回線の確保は長年の念願だったが、日本はこれを三年で実現した。

日英同盟

この頃、政府の対外政策は伊藤博文をロシアに派遣して日露協商の交渉をさせる一方、林董（旧幕臣、ヘボン塾で学ぶ）駐英公使に日英同盟交渉をさせるという、二股外交を進めていた。そして、明治三十五年（一九〇二）、時の首相桂太郎は日英同盟に調印した。これは、日本の命運を左右する重要な決定だった。イギリスを味方にするだけではなく、情報戦略の同意を取り付けたからである。福建省福州の陸揚げ地でイギリスの電信局に接続し、日英で共用暗号を用いる協定を成立させた。これで、ロシアに機密情報が漏れるこ

となく世界情勢を知ることができ、海底ケーブルを切断されても別ルートで情報交信ができるようになった。

なお、日英同盟成功の伏線は明治三十三年（一九〇〇）に起こった義和団事件での元会津藩士柴五郎中佐の献身的な活躍にあった。この事件は中国人による外国人の武力排斥行為であり、当時北京に滞在していたイギリス、フランス、ドイツなどの民間人および多数のキリスト教徒が迫害された。公使区域全体の総指揮官となったイギリス公使マクドナルドは、柴中佐に王府防衛の指揮を依頼した。英語と仏語に通じた柴は二ヶ月間の籠城戦を見事に戦い抜き彼らの命を救った。そのマクドナルドがその後駐日イギリス公使となって、日英同盟の締結に発展したのである。

また、当時明治学院総理だった井深梶之助（元会津藩士で貞雄の二年後輩）が宣教師ウイリアム・イムブリーを桂首相と会談させたところ、イムブリーの論文がロンドンの『スペクテイター誌』に掲載され、イギリス政府に日本の立場を理解させるのに役立ったという。

無線通信

一方、無線電信の開発に当たったのは逓信省の浅野応輔、松代松乃助に加えて、旧制仙台二高（東北大学の前身）の物理学教授だった木村駿吉だった。駿吉は幕末に勝海舟と共に「咸臨丸」で太平洋を渡った木村摂津守の三男で、貞吉が書生となった藤沢次謙（幕末の徳川幕府軍事副総裁、この時の総裁は勝海舟）の兄甫周夫人の弟に当たる。駿吉は自費で実験設備を整え、二高の校庭にアンテナを立てて実験に取り組んだ。これらの挑戦的研

究の原動力は志田林三郎（通信省では貞雄の上司で英才）がマルコーニが一〇年前に手がけた無線実験の再現だった。

松代と木村は海軍技師として迎えられ、マルコーニの無線機の改良に取り組み、「コヒーラ検波器」（無線電磁波を検知する装置）の開発に成功した。到達距離は六〇～二〇〇マイル（九六～三二〇キロメートル）で、本土の海岸ならびに島の見晴らしの良い要所には多数の無線装置が設置された。

明治三十六年（一九〇三）、三六式無線機が誕生し、通信距離が一〇〇〇キロメートルに達した。日本海軍は、全艦船に搭載するべく無線機工場を設置し昼夜兼行で製造した。実践用の三六式無線機を完成させ、開戦までには総ての艦船および連絡船に搭載した。三六式とは開発した明治三十六年を指す。なお、当時のロシア艦隊はマルコーニ社製無線機を搭載していたが、独自技術がなく性能改善ができなかった。この違いが、やがて戦場での勝敗に決定的な影響を及ぼすのである。なお、三六式無線機については、小池明著『日本海海戦と三六式無線電信機』（文献8）に詳しい。

電話サービス

明治二十九年（一八九六）から東京市内の近距離電話サービスが開始された。この技術は直ぐに軍用にも導入された。電信はオペレーターがいなければ発信も受信もできない。電話なら指揮官がいつでも簡単に指示を出せる。このために、前線と基地間をこの近距離電話で接続したのである。

さらに、対馬から南西に広がる海域を緯度・経度で一〇分ずつ碁盤目状に区切り、それ

ぞれ、二〇三・二〇四・…などと番号を振り、無線機を積んだ多数の艦船を決められた海域に割りつけて、往復運動をさせて艦船群による哨戒網を構築した。

明治三十六年になると、通信省は国内の電信電話回線を臨戦態勢に向けて整備した。横須賀、佐世保、小倉、青森などの軍港用に長距離電信を増設し、短距離の電話交換を開始した。この時期に電話交換機の導入で活躍したのが日本電気の創始者岩垂邦彦（小倉藩出身）だった。発明王エジソンの元で働き、志田林三郎との交流を深めた岩垂は明治三十二年（一八九九）にアメリカのウェスティングハウス（WH）社と日本初の合弁会社を設立し、電話交換機事業に乗り出したのである。

日露戦争の開戦

明治三十七年（一九〇四）二月十日、日露戦争が始まった。日清戦争が終わってまだ一〇年も経っていないかった。日本は大韓帝国との間には日韓議定書を結び、清国は局外中立を宣言した。正に、日露の直接対決である。

戦争は仁川上陸後、遼東半島の突端に位置する不凍港旅順を巡る攻防戦で始まり、鴨緑江会戦、黄海海戦等を経て八月～十一月にかけて旅順総攻撃となり、一進一退を繰り返した。陸軍の体制は大山巖元帥、児玉総参謀長の下、第三軍司令官乃木希典が直接の指揮を執った。松平容大の五男松平英夫陸軍中佐はその副官として加わった。この戦いに一三万人が投入され五万九〇〇〇人の死傷者を出した。児玉らは膠着状態こうちやくに陥った戦況を打開するため、旅順要塞北西の二〇三高地に攻撃目標を絞り込み、六万四〇〇〇人を投入した。二〇三高地は旅順港を一望出来る要地だった。日露両軍ともに戦死五〇〇〇人、戦

た訳ではない。まだまだ豊富な予備兵があり、これらを投入する余地があった。

日本海海戦

日露戦争の天王山は日本海海戦であった。バルト海沿岸を本拠地とするロシアのバルチック艦隊は、当時、世界最強と恐れられていた艦隊だった。ロシアは日露戦争に決着をつける切り札としてこの艦隊を投入した。バルチック艦隊は六ヶ月をかけて地球を半周する航海を続け、ウラジオストックを目指していたが対馬沖で日本軍の仕掛けた三六式無線機を搭載した海軍の情報網にかかった。

明治三十八年五月二十七日、哨戒中の「信濃丸」が濃霧の中で灯火中の敵艦を発見、午前四時四五分、近くいた旗艦「厳島」に打電した。この極秘電報は直ちに転電され、鎮海湾の「三笠」の指令官東郷平八郎の参謀秋山眞之が下記の暗号電報を東京の軍司令部に発信した（文献9）。

（発・連合艦隊司令長官／宛・軍司令部長）

「敵艦隊見ゆとの警報に接し 連合艦隊は直ちに出勤 これを撃滅せんとす 本日天気晴朗なれども波高し」

敵艦隊はロシアの第二・第三艦隊「バルチック艦隊」だった。

出羽重遠（会津出身の海軍中将）が率いる第三戦隊は巡洋艦「笠置」など四艘と駆逐艦四艘で編成され、直ちに戦場に向かった。九州領海で繰り広げられたこの日本海海戦は、世界戦史上空前絶後の大勝利だった。戦艦六、巡洋艦四をはじめ、合計一九艘を撃沈、艦

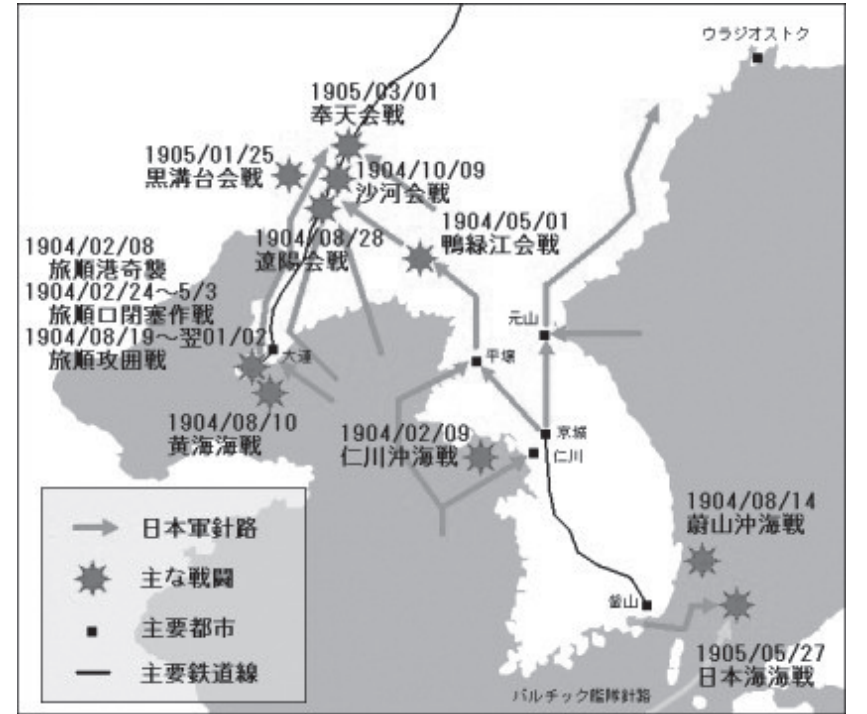


図7 日露戦争の地図

傷者一万人以上を出す激戦の末、十二月四日にこれを占領し、ロシア軍旅順要塞司令官のステッセル中将は明治三十八年（一九〇五）一月に投降した。乃木はこの戦争で二人の息子を失った。

貞雄は明治三十八年一月に札幌郵便局工務課長として転任し、戦時下の軍用通信回線や無線基地の建設、電話交換業務などにあたった。七月には長男一雄が樺太に出征した（翌年九月に死亡）。

その後、日本軍は苦戦しながらも前進を続け、二月にはロシア軍の拠点・奉天でなんと総兵力五七万人を投入した奉天会戦を開始し、三月十日に奉天を占領したが、ロシア軍の撃破には失敗した。一連の戦いで日本軍は予想外の死傷者を出した。ロシアもそれ以上に大きな損害を出したが、国土面積が日本の四五倍の大国である。極東の一部地域を失ったからと言って本国に攻め込まれ

船五艘と病院船二艘を捕縛した。戦死者六〇〇〇人、捕虜六〇〇〇人という。対する日本側の損害は水雷艇三艘沈没、戦死一一五人、負傷五七九人という。

なお、三六式無線機の開発者木村俊吉宛に秋山眞之から六月十日付けで「この情報は値千金だった」との長文の感謝状が届いている（文献8）。

その海戦戦略は世界の注目を浴びた。

「弱小な日本艦隊はなぜロシアの大艦隊を粉碎できたのか」

日本軍の工兵隊は戦況に合わせて、海底ケーブル、陸上電信および無線基地を移動させるという離れ業をやったのであったのである。

明治天皇の御詠「電信」（明治三十七年）がこの状況をリアルに伝えている。

電信

針金の 便りのみこそ 待たれけり 軍の庭を 思いやるにも

停戦交渉

日本海海戦で日本軍が大勝した後、日本政府は早期停戦を目指した。戦況は優勢とは言え、大規模な陸軍を温存している大国ロシアとこれ以上戦争を継続するだけの国力がなかったからである。早期和平を強く押したのは児玉で、その交渉に当たったのは外務大臣小村寿太郎だった。小村は調停役を米国に依頼した。

当時英仏列強に肩を並べるまでに成長し国際的権威を高めようとしていた米大統領セオドア・ルーズベルトは、六月二日、駐米ロシア大使カシニーを招いて講和を勧告した。

しかし、カシニーは、

「日本軍が未だロシア領土の寸地尺土（わずかな土地のこと）をも占領せざる現状にて講和するは、ロシアの名誉を失墜するものなり。余は未だ講和の訓令に接せず、未だ応ずるを得ず」

として受け入れなかった。

しかし六月七日頃からようやくロシア内部にも講和の動きが見え始め、改めて六月十日、ルーズベルトは日露両国に対して講和を勧告した。さらには独、仏もロシアに講和に応じるように勧め、講和の声は全世界に広まった。

これより前、明治三十八年（一九〇五）一月九日、ロシア帝国の当時の首都サンクトペテルブルグで血の日曜日事件が起こった。デモ参加者は六万人に達し、労働者の法的保護、日露戦争の中止、憲法の制定、基本的人権の確立などを掲げて、皇帝ニコライ二世へ直訴した。これをロシア政府は弾圧し、死傷者の数は一〇〇人以上にのぼった。この時からすでにロシア革命が始まっていたのである。

六月十二日、ロシアは講和勧告に応ずる意向を正式に表明した。しかし、ロシアは「たかだか小さな戦闘において敗れただけであり、ロシアは負けてはいない。まだまだ継戦も辞さない。賠償金支払には一切応じない」と終始強硬姿勢を貫いたため、交渉は暗礁に乗り上げた。

戦争の終結

樺太占領後の明治三十八年八月十日から日露講和会議がポーツマス（アメリカニューハ

ンプシャー州）で開催され、条約には以下の事項が盛り込まれた。

日本の朝鮮における優越権を認める。

ロシアは樺太の北緯五〇度以南の領土（南樺太）を永久に日本へ譲渡する。

ロシアは関東州（旅順・大連を含む遼東半島南端部）の租借権を日本へ譲渡する。

賠償金は一銭も取れなかったが、樺太の南半分は日本領となり、遼東半島の一部の租借権を獲得した。そして、九月一日に日露両国は休戦議定書に調印し、休戦状態となった。日露両国がポーツマス条約を批准して戦争が終結したのは明治三十八年十月十五日だった。

この戦争で日本が賠償金を放棄して早期休戦したことに対して、海外メディアの論調は概ね好評だった。中でも『タイムズ誌』はセオドア・ルーズベルト大統領が新渡戸稲造が英語で出版した『武士道』(Bushido-The Soul of Japan)を三〇冊購入し、政府要人、軍学校等に配布したことに言及し、この寛大な措置を日本の武士道の「義」に基づくものであると解説した。また、アジアの一小国がロシアの支配を実力で阻止したことは、世界各地で民族意識を目覚めさせる一因になった。なおルーズベルトはこの条約仲介の功が評価されて、翌年にノーベル平和賞を受賞した。

第七章 むすび

人類の歴史は農業↓工業↓情報へと発展してきた。農業は胃腸を工業は筋肉を情報は頭脳や感覚器を助け、人の役に立ってきた。この一〇〇年を振り返ると情報技術（IT）の

発展には目覚ましいものがある。ITの先覚者は米国で、半導体の発明がこれを支えた。我が国のITは世界のリーダーとは言えないまでも先進国のトップグループにあると言える。

ITの嚆矢は電信である。飯沼貞雄はその生涯を電信事業に捧げた。電信との出会いは美祢の檜崎屋敷で謹慎中に読んだ福沢諭吉の『西洋事情』である。飛脚時代に「遠距離間で一瞬にして情報交換できる」という正に夢のような技術が欧米で実用化されていることを知った。自刃に失敗した彼にとって晴天の霹靂だった。上京して直ぐに公務としての国内電信網構築の先頭に立った。そして、戦時に備えての電信の最重要部品「碍子」を会津本郷焼国家特需として六年がかりで完成させた上、日清戦争で自ら朝鮮に出征して釜山・平城間に敷設した。戦時における情報力の差は勝敗に直結する。この時の電信は勝敗の鍵を握る存在であり、今流に言う「ゲームチェンジャー」として機能したのである。

その後は電話網の構築に全国を駆け巡ると共に、無線の積極的導入など我が国の通信近代化に貢献した。戦時に備えた情報網の構築は長距離通信可能な無線機の開発および全戦艦への搭載等によりその後も一層強化され、日露戦争では大国ロシアを凌駕するに至った。その決め手は三六式無線機(到達距離一〇〇〇キロメートル)と言っても過言ではない。

IT分野はその後、電話、ラジオ、テレビの登場に加え、デジタル化が進み、インターネット、電子メール、パソコン、携帯電話、スマホが登場し、これらのインフラとして光や衛星通信が開発され、「何時でも、何処でも、誰とでも」の通信が可能になった。NECで三〇年間に亘ってこの分野の研究開発に携わった筆者として、我が国のITの原点が電信に始まり、その重要性が継承されてきたことを誇りに思う次第である。

なお、筆者は貞雄が「日清戦争時に朝鮮の電信架設に深く係わった」こと、および『会津本郷焼の歩み』に「日清戦争時に軍用碍子の特需があった」ことは早くから知っていた。しかし、我が国の碍子は明治初期から佐賀の有田焼が独占していたので、会津本郷焼の順番に確信が持てなかった。今般、機会を得て本稿をまとめることができたのは、関係者のご協力の賜物であり感謝申し上げます。

- 文献1 『会津碍子の官需への採用についての一考察』宮地英敏 九州大学学術レポジトリ 平成三十年（二〇一八）三月十五日
- 文献2 『会津本郷焼の歩み』会津本郷陶磁器業史編纂委員会編 福島県陶業事業協同組合 昭和四十四年（一九六九）pp.一六七―一七五
- 文献3 『白虎隊士飯沼貞吉の回生』飯沼一元 ブイッソーリユーション 平成二十五年（二〇一三）三月十五日
- 文献4 『山川家の兄弟』中村彰彦 学陽書房 平成十七年（二〇〇五）十一月
- 文献5 『従軍中の略歴』飯沼貞雄 私家版 明治二十八年（一八九五）
- 文献6 アジア歴史資料センター
- 文献7 『会津史談会誌』第二三号 「飯沼貞雄翁の電信線架設に就いて」 昭和十八年（一九四三）二月
- 文献8 『日本海海戦と三六式無線電信機』小池明 歴史春秋出版(株) 平成二十三年（二〇一一）三月八日
- 文献9 『極秘電報に見る戦争と平和』大塚虎之助 熊本出版文化会館 平成十四年（二〇〇二）五月二十日



PROFILE

飯沼 一元
いいぬま・かずもと

1943年、仙台市生まれ。蘇生白虎隊士飯沼貞吉（後貞雄）の直系の孫（貞雄二男一精の三男）。1961年、宮城県立仙台第一高等学校卒。1965年、東北大学工学部電子工学科卒。1970年、東北大学で工学博士号取得。同年、日本電気（株）へ入社。通信研究部でMPEGの基本特許発明。後、研究所長、本社理事支配人。2003年、(株)ライステックを設立し代表取締役。米ぬか健康食品のベンチャー事業に携わる。2010年4月、白虎隊の会設立。会長。2011年7月、海の会設立。東日本大震災被災学生に奨学金支給支援。

著書
『白虎隊士飯沼貞吉の回生』『ニューロコンピュータ』他

昭和の易聖 加藤大岳

池月 映